１３９「声」

以前から気になっていたことがある。それは声の質、声の良さについてだ。
アルゼンチンのフォルクローレが好きで良く聴いているが、みなとても声がいい。特に男性の歌声は、ことごとく高音の澄んだいわゆる美声。プロの歌手だから、歌が上手いのは当然だが、とにかく声がいい。勿論、歌のうまさと声の良さは別だし、良い声が味わいのある声というわけでもない。

世界中に声がいい人は限りなくいると思うが、日本人とは違う声の質、うまい言葉が見つからないが“艶がある”という表現が適当かも知れない。

アルゼンチンは移民の国、イタリアやスペイン，ドイツなどから移住した人々、それとアジア系の先住民、その混血で構成されている。特に声がいいと感じるのは、ヨーロッパ系の人々である。アジア系の人の高音の歌声は、金属的な響き「キンキン」聴こえるように感じる。

そこで、なぜ声がいいのか？その原因を調べてみた。多分その原因は声帯の違いにあるのではないかと考えていたが、それほど単純ではなかった。

声の質はほぼ骨格で決まるようだ。特に鼻の形や大きさは声に影響するので、自然と同じ人種は声が似通ってくる。勿論、個人差もあるし、生活習慣や環境なども微妙に関係する。

骨格の違いは人種の違いによるところが大きく、欧米人は鼻が高い，頭蓋骨が前後に長いなどから、「鼻腔などの空間が広く」共鳴しやすいので“いい声”になる。共鳴しやすいとは、倍音（元の音の整数倍の周波数音）が多く含まれやすい状態をいい、キラキラしている感じの声になる。

また、黒人は口や歯や顎全体が大きいことから「口腔の空間が広く」共鳴しやすいうえ、声量も豊富である。一方、日本人を含むアジア人は、欧米人や黒人と比べると骨格的には条件が悪く、共鳴腔全体が小さいので、低域倍音も少なくなり声の厚みにおいても不利である。

ある歯科医によれば、欧米人の歯は非常に固く削りにくいそうで、固い歯に響く声と柔らかい歯に響く声では、石と木に響くような違いが生まれると考えられる。

ただし、このようなことは歌の上手さには直接関係しない。もしそうであるとすれば、子供は歌が上手く歌えないことになってしまう。

声帯の違いは声の質を決定する重要な要素である。欧米人は日本人に比べ、より薄くしなやかな声帯を持っていると言われ、より高くつやのある女性的な声を出すのに有利である。

声帯が発した音（咽頭原音）は、喉や口の開け方により、音の周波数の混ざり方を変え響かせることで声の質が決まるため、“いい声”は結局骨格によるところが大きいといえる。

声の良さ，歌の上手さに関して非常に重要な要素は『言語』である。
日本語はとても母音が多い、いわゆる“母音言語”である。そして、母音の数が少なく５つしかない。

母音は「声帯を鳴らす」ことで出る音で、“ア・イ・ウ・エ・オ”は必ず声帯を鳴らさなければならない音。母音の多い言葉は、声帯を頻繁に使うため硬く単調になりやすく、声帯を柔軟に使いにくい。

一方、英語など欧米言語は子音言語と言われる。子音は“歯・舌・唇・息”などで作る「声帯を鳴らさない音」で、送られてきた呼気が口腔内の舌や唇の位置によってふさがれ，流れが一瞬止まることで

破裂音，摩擦音，流音，声門音などを作り出している。従って、子音をたくさん使う言語の人は、歯・舌・唇・息のコントロールが上手くなる。

「子音を多用する」という言葉の特性が、歌に必要な「息の流れ」「舌の柔軟性」「唇の使い方」などの点で、日本語に比べ歌に向いている。音楽的には、欧米言語は日本語よりも歌いやすい（音程が取りやすい，リズムが取りやすい，質のいい声が出しやすい，高音が出しやすい，負担が少ない）という特徴を備えている。

これらは、西洋化された歌を日本人が歌う場合であり、日本文化から生まれた民謡，演歌など一言一言が長く、声帯を硬く使い（喉を締め）、ゆったりと音の流れる歌は日本人にとって歌いやすい。言語によって歌の上手さが決まるのではなく、言語に相性の良い歌がそれぞれにあるというべきだろう。

声楽を勉強した日本人の話。

発声上、もっとも適している言語はおそらくイタリア語だろう。イタリア語に対し、日本語の母音の発音位置は、基本的に浅く前の方にある。もう一つ特徴的なのは「呼吸の浅さ」で、「吸えない・吐けない」のが日本人、声楽や管楽器演奏にハンデがある。これは“大声を出したら迷惑だからダメ”という習慣などの影響からか、欧米人と比べると基本的な声のボリュームの違いを実感することが多いと言うことだ。

西洋発声法の代表的なものとして、イタリアで発達した“ベルカント唱法”（*Bel-美しい canto-歌声*）がある。人間の声を楽器として捉え、コンサートホールいっぱいに響くような声を発する技法である。

この唱法をマスターすることによって、欧米人のような骨格をもたない日本人でも、無理なく美しい声を響かせることができる。日本語は口先の浅い部分で発音し、アクセントは音程の高低でつける。表情もあまり変えることなく発音し、イタリア語と比べると平面的な話し方となっている。

一方、イタリア語の母音はかなり深く、立体的な発音が特徴。顔の表情は豊かで日本語より高い響きで発音し、周りの空間を響かせるように話す。従って、イタリア人は話の延長上にベルカント唱法があるが、日本人にとっては、普段使っていない顎，舌や唇の使い方，顔の筋肉などを鍛えることが必要になってくる。日本人のオペラ歌手は厳しい訓練をしてきていることがわかる。

少し話がずれるが、以前からベルカントについて感じていたことがある。それは、オペラ歌手が歌う日本語の歌を聴くと言葉がよく分からなくなってしまうことだ。これについて調べていたら、元オペラ歌手の「渡辺明子」氏の論文が見つかった。以下、論文を引用する。

イタリア語の母音は[a][e][i][o][u]の５つ。（[e][o]には２種類の発音がある）日本語の母音の[a][i][u][e][o]とイタリア語の[a][e][i][o][u]の音は、咽頭から口腔内で調音された時点ですでに響きが違う。イタリア語では、口の開き方の広く深い順から[a][e][i][o][u]の方が自然であり、響きの違いは５つの音の並びの違いが大きく影響していると思われる。

西洋発声法で声楽家の歌う日本歌曲は、時に日本語が大げさに不自然に聴こえてしまうことがある。原因はいくつかあるが、その一つに「母音」の意識の違いがあると考える。つまり、声楽家の歌う日本歌曲は、日本語であるにもかかわらず、イタリア語式[a][e][i][o][u]の響きで作られるのに対し，聴衆の多くは，「あ」「い」「う」「え」「お」の日本語文化の中にいるという違いである。

日本の歌や日本語の歌詞の音楽には、それなりの日本語に合った発音や発声法が確立されるべきといわれて久しい。民俗音楽研究の第一人者である小泉文夫氏 (※1) は「西洋音楽の発声を習った声楽家は日本語の歌をうたう時も、西洋風の母音を使うので、オペラなどきいていても意味が分からず、その表現は上すべりして実体感が無い」と角田 (※2) の著書『日本人の脳』の中で述べている。

欧米系の言語（本研究ではイタリア語であるが）の子音文化の影響を受け、「さ」=[s]の発音時に、日本語での発音に比べかなり時間をかけてしまう傾向がある。また母音では「さくら　さくら」の「く」に違いが明確に出る[u]の母音である。ベルカント唱法によりイタリア語の[u]で歌うと、日本語の[o]に聴こえてしまうのである。日本語としては「さこら」と歌っているように聞こえる。

[u]の発音時、イタリア語は後舌の状態で唇に意識が集中するのに比べ、日本語の「う」[u]はかなり口腔が狭い状態で鳴る。子音[k]の発音時におきる摩擦の力が下あごに加わるため、余計に響きが浅く感じられることがある。その場所で響かせて発声すればよいのだが、声楽を学んできた者にとって、この浅くのどの奥に近いところで行う発声はありえないことなのである。しかし、日本語はその位置に発音ポイントがあるのだから、本来はその位置で発声・発語すべきと考える。しかしその状態は、口腔内がかなり狭くなって響鳴させにくい。いわゆる喉声との境目であり、遠くまで響きが届かない声になる可能性がある。よって、響きの豊かさを優先することで、よけいに[o]になりがちである。

それは、聴き手から見ると不自然であることは間違いない。声の質を優先するか、言葉の明瞭さを優先するかの問題になる。そこで筆者は、発音時の舌の位置が浅くならず響鳴して客席に聴こえたとき、深みのあるクリアな[u]を作ることを目指した。そして、子音となる[k]の直前の「すき間」を作ることなく、母音[u]の響きにつなぎ、聴衆からより自然な「く」に聴こえるように心がけた。（引用終わり）

ベルカントと日本語の違和感は、以前から思っていたことだったが、声楽家もかなり苦労していることが伺える論文だと思う。

声の質は声帯で決まるものと思っていたので、使う言葉によって、歌声の質に大きな差が出るということは驚きだった。しかし、その理由は充分納得できた。

西洋発祥の歌を日本人が歌うとき、言葉の意味の理解とは別に、使う言葉が違うことによる壁は思った以上に高いことが分かった。だから、逆に日本で生まれた民謡，演歌などを欧米人が歌うとき、日本人が歌うようにいかないので、聴いたとき違和感があるのは当然である。

言葉の延長上に歌があるのだから、言葉と歌は不可分の関係にある。その国の人が，その国の言葉で作られた歌を、その国の言葉で歌うのが最も歌やすいということなのである。（２０２３．０１．０６）

（※１）1927～1983 東京芸大教授、民族音楽学者

（※２）1927～　　東京医科歯科大学名誉教授、日本人の特殊性を示す日本人論『日本人の脳』を著す「西洋人は虫の音を機械音や雑音と同様に音楽脳（右脳）で処理するのに対し、日本人は言語脳（左脳）で受けとめる、という主張」